

日独比較文化論（前）VI

大橋 進一郎

前 書 き

長年にわたり連載してきた本報告書もここに最終回を迎える。執筆開始が1965年6月脱稿が1966年8月であったから、内容はもうかなり古いものになってしまった。しかし、その間、問題の本質にどれだけの変化があったであろうか。本質とは言わぬまでも、現象面においてすら、あまり変わっていないように思える。⁽²⁴⁾

さて、今回は第10章「自然環境その他物理的要素に基く風俗習慣の違いから派生するさまざまな誤解」の残り3節から始める。まず第13節では、日本人独特の自己批判の仕方が背景を知らぬ外国人を誤解に導く可能性を示し、第14節では多くの誤解、特にデータに関するものは訂正が容易な筈という実例を挙げ、第15節では「日本人がドイツから学ぶべき最も重要なことは、ドイツ人が期待していることとは全く違う」⁽²⁵⁾という所見について述べる。

第11章「誤解の発生源」では、第1節初等教育、第2節マスコミ報道、第3節意地の悪い行為の三点から考察する。第一の問題は『文芸春秋』誌に掲載された一橋大学石田教授の研究報告を引用させて頂き、多くの国の初等教育において日本は実情と掛け離れた姿に紹介され、きわめて原始的かつ不思議な国の一つであるかの如く取り扱われている事実に注目する。このような教科書は、学童に興味を持たせるための教育上の便法であろうが、内容が事実に反したり誇張が強過ぎたりして、実態とはほど遠いイメージを子供たちに与えてしまう。確かに、初等教育という見地から、このような便法には、正確とはいえデータの羅列に頼る無味乾燥な授業と比較して、その利害得失につき新たな議論を呼ぶ余地はあるが、少なくとも誤った基本的認識を形成してしまう大きな原因であることに間違いはない。

次にマスコミの報道についてであるが、1966年日本で起きた一連の飛行機事故に関するドイツの一部報道機関の態度について論じる。当然のことながら公正な報道もあったが、ここに紹介するニュースの方が遙かに庶民の話題に上ったのである。最後に、1965年度ベルリン映画祭で、日本の参加作品をめぐるいわば醜聞とでもいうべき出来事を取り上げる。

前章第14節でデータに関する間違いは正すのが容易な筈であると述べたが、本章第1節で分かるように、国によってはこのような簡単な問題でも簡単には訂正しないのである。更に、真実を

語ることすらかなりの抵抗を受けることもある。最終章「誤解を正すのは如何にむずかしいか」は、この問題を論じたもので、例えば、ドイツ人が「若干の人が誤解や偏見を持っているとしても、それが国民の一般常識とは言えない」と言って事実の認識を拒否したり、「どこの国民にも同じような誤解と偏見があるではないか」という衡平の論理を持ち出してくるとき、議論の摺れ違いを避けるためには、双方の忍耐が必要になる。問題は、ドイツ人の抱く誤解と日本人の抱く誤解では評価の方向が逆、つまり過少評価と過大評価の違いが論点なのである。第1章から第6章までの記述はこの事実関係を具体的に述べたもので、次に第7章から第10章まで四つの背景を探り、第11章では三つの人為的原因を考察した。「日本にこのような鉄道がありますか？」というような単純な質問に答えるため、実にこれだけの手続きが必要であった。

一方、日本人からは「ヨーロッパに住まわせて貰っているのに、ヨーロッパ人を批判するのはよくない」という儀礼上の注意もあった。筆者は決してヨーロッパ人特にドイツ人を批判しているつもりはない。真実を知ってもらいたいただけなのだ。好ましからざる事実誤認を放置しておくより正す方が、相互理解に基づく真の友好関係促進に役立ち、日本の国益にも叶う、と信ずる。少なくとも、第7章で引用した「ロウズマリー号事件」や「神戸の英国水兵強盗事件」の際に見られたような、不当な非難を外国人に繰り返させてはならない。

次に、今述べた「過少評価と過大評価の違い」という意味を明確にしておきたい。明治の文明開化以来、日本人は西洋文明の吸収に心血を注いできた。「和魂洋才」という言葉がその心情を表している。第二次大戦に破れた後再びこの傾向が強まり、廃墟から復興すると今度は「追いつき、追い越せ」がスローガンになった。この報告書を書いていた1960年代半ばはまさにこの時代で、学習をめぐる日本人と西洋人の師弟関係は、まだ一般に西洋人が師匠で日本人が弟子というものであった。日本人から見てさえそうだとすると、西洋人の心の中に、彼等が常に教える立場にあるという自負の念があったとしても、あながち非難するには当たらない。しかしこのような関係は、長い歴史から見れば、日本の近代化に当たっての一時的現象に過ぎないのだ。それを永遠の真理であるかのようにいつまでも固執し、われわれにも周知の事実として押し付けてくる態度に異議を唱えるのが本小文執筆の動機であった。これは「謙譲の美德」や「報恩の精神」という日本独特の道德律とは次元を異にする議論である。

日本が経済的発展を遂げた現代では、この師弟関係はすでに消滅し、軍事力を除けば、対等な互恵関係が国際交流の大前提になった。勿論、知的な分野においても、同じことが言える。にも拘わらず、欧米には過去の一時的師弟関係にしがみつき、知的水準の優位を前提にあらゆる議論をする者が後を断たない。この現象には日本人にも責任がある。外国人に日本の実態を理解して貰うため、これまで日本の特異性を説明してきたが、この特異性こそが誤解の元凶であろう。勿論、特異性は伝統と結びつき、これなくしては民族の存在価値が問われることになる。しかし、伝統の美名に隠れた不合理なしきたりが、どれだけ外国人の目に日本人社会を判り難くしている

ことか。日本が世界の片隅に逼塞していて殆ど誰の関心も呼ばなかった時代ならば、どのような特異性でも黙認されようが、経済大国と言われる今日では、もはや特異性は何の理由づけにもならない。普遍妥当性のある論理に基く説明が必要なのだ。この点、われわれは努力を怠ってきたのではなかろうか。

次に、在日外国人の意見について考えてみたい。彼等は日本で生活しているので、現象的誤解について言えば、日本を知らない人たちのような誤ちは犯さない。しかし、見聞した出来事の意味がよく理解できない場合、しばしば見当外れの解釈をすることがある。これは在日外国人に限らず、世界中で、程度の差こそあれ、一般に見受けられることなのだ。ただ、知的水準の評価になると、ここではかなり根強い偏見がある。すなわち「欧米に留学すればもっと質の高い教育が受けられる」と言う。確かに、ある分野では欧米の方が水準が高いものもある。しかし、一般的に教育水準が日本より高いとは思えない。

在日外国人、特に欧米人は、一部の人を除けば日本語が十分理解できず、日本人との会話は原則として英語に頼っている。日本語の新聞・雑誌を読みテレビを見て社会の情報を得る者は、きわめて稀である。20年あまり前のことだが「日本で最大の納税企業はコココーラだ」という噂が、まことしやかに、在日欧米人の間に流布したことがある。もし日本の新聞に目を通していけば、このようなデマの入り込む余地はない筈である。一方、日本人の方は一般に英会話が苦手で、英語で内容のある議論ができる者はあまりいない。したがって、多くの場合、外国人が語り手で日本人が聞き手という、前述の師弟関係が再現してしまう。欧米人の方は、始めのうちこそ言葉のハンディキャップを考慮に入れても、いつの間にか、英語力が教育水準のバロメーターであるなかのような、錯覚に陥ってしまうようだ。

誤解を避けるため付言しておくが、本報告書は序文で述べた通り「庶民レベルのフィールド・ワーク」であり、本文でも折りに觸れ述べきたように、筆者以上に日本をよく識っている外国人研究者の存在⁽²⁶⁾を否定するものではない。ジャパノロジストと言われる学者の数は確実に増加している。しかし、彼等の本国で、彼等の著書がどれだけ読まれてきたであろうか。更に、日本人が欧米の作品を読む数と欧米人が日本の作品を読む数を比較すれば、日本がいくら物質文明の製品を輸出しても、精神的文化の一方的輸入大国であるという事実を認めざるをえないであろう。この状態が続く限り、私達は理解と誤解の間に窪む谷間から好ましい方向に這い上がることはできないのである。

最後に、真実が伝わらないということが及ぼす影響に觸れておきたい。日独問題からは外れるが、最近「作為的誤解」のもたらす結果を示す好事例が時局問題の中に認められる。すなわち、領土をめぐる日ソ及び日ロの外交交渉では、ロシア国民の事実認識の誤りが既成事実の積み重ねに貢献し、交渉当事者の掲げる「法と正義に基く解決」を複雑化している。

この問題については、第9章第8節（紀要第7巻、1990）の国境画定の歴史的経過、同11節

(同第8巻, 1991) にソ連参戦(1945)の経緯をそれぞれ簡単に記しておいたが、ロシア国民の認識は、これと全く違うものであった。このことは、戦後ずっと続いたソ連政府の「日ソ間に領土問題は存在せず」という態度、また共産圏のマスコミ報道などから、容易に推測は出来たが、推測を裏付ける資料が入手できなかった。

数年前、東京とモスクワの市民によるテレビ討論会を見ていると、領土問題では両市民の間に事実認識の相違があり、モスクワ側から日本人の意見は司会者の誘導によるものだという苦情が出て東京側がこれに全く逆の見方で反撥し、結局議論は摺れ違いに終わった。1990年8月20日、日本テレビのプラスワンという番組で「日露戦争から関東軍の武装解除までソ連撮影の終戦記録日本初公開」というニュース映画が放映されたが、その中で「日露戦争で日本が南樺太と千島列島を奪った」という説明は、言うまでもなく後半の部分が全くの嘘であり、開戦理由の「原爆が落され、これ以上人を殺してはならないという人道的理由」は明らかにこじつけである。『週間文春』1991年9月5日号「ニュースの考古学」・無疵の「ロシア主義について」猪瀬直樹氏による高校用歴史教科書の「露日戦争(旅順)」と「第二次大戦」の紹介は、前述の推測を裏付けるものであるが、更に今後の研究の成果を待ちたい。

最近、ソ連邦の崩壊とともに、やっと真実の語れる可能性が強まった。1991年9月12日付『讀賣新聞』朝刊によれば、ルスラン・ハズブラトフ・ロシア共和国最高会議議長代行は9月11日金丸信氏と会談し「今日までソ連国民に間違った事実を教えてきたことを厳しく反省している。本当のことを理解させるのに時間が必要だが、この過程で返還の方向で事柄を進める」と語ったという。これは日本側のスクープなので、ロシア側の報道も確かめなければ断定はできぬが、あらゆる情報から、真実が除々にロシア国民の間に浸透していることは間違いなさそうだ。

ここで重要なのは、40年あまりロシア国民の殆どが全く知らなかったか、政府の発表を鵜呑みにしていたか、いずれにせよ事実とは違う認識で是認してきたソ連の北方領土占領が、既成事実として、原状回復ではなく「現状維持こそ法と正義に基く解決である」と主張する者たちに口実を与えていることである。このエゴイズム剥き出しの問題は、ヤルタ会談からソ連の崩壊に至るまでの、米ソ関係を軸に展開したものであり、それにロシアの国内事情や利害関係国の思惑も加わって、解決をむずかしくしている。因みに、ある意味では当事者になるアメリカ合衆国でも、一般大衆はロシア国民以上に真相、いや問題の存在すら知らぬ者が圧倒的多数を占めているように見える。

このように観察してみると、誤った認識が不法かつ不当な行為の既成事実化に貢献し、その既成事実が真実とは関係なく一人歩きしようとする現象に、誤解の持つ恐るべき力を感じるのである。

本報告書の作成・発表にあたり、多くの人から御支援を頂き、ここに謹んで御礼申し上げます。特にドイツの方々には、必ずしも愉快的話題ではないのにも拘らず、快く御協力を賜わり、感謝

の気持ちと同時に尊敬の念を禁じ得ないことを申し添えさせていただきます。なお巻末に、本報告書をめぐる新聞社および大使館との往復文書を掲載しておきます。

Das Tal Zwischen den Höhen “gutes Verständnis” und “Mißverständnis”

— Japan, das zu wenig bekannt ist —

Abschnitt Zehn

DER UNTERSCHIED DER BRÄUCHE UND GEWOHNHEITEN

(Fortsetzung)

13. DIE JAPANER SIND SEHR KRITISCH

Die Japaner lieben ihr Land zu kritisieren. Alle Japaner sind sehr kritisch. Sie sprechen immer über die schlechten Seiten Japans. Die Filme zeigen oft ein unglaublich niedriges Lebensniveau in Japan. Sie zeigen nur das schlechte Leben in Japan und lassen die Leute über die Ungleichheit der Gesellschaft nachdenken. Das ist eine wertvolle Arbeit für die Japaner, aber sehr irreführend für die Ausländer, wenn sie sich ein Bild von Japan machen wollen. Ich habe oft einen japanischen Spielfilm im Deutschen Fernsehen gesehen. Diese Filme zeigen immer die alte Gesellschaft, z.B. ein japanisches Leben vor 1.000 Jahre, oder das schlechte Leben in Japan nach der Katastrophe des zweiten Weltkrieges. Ich habe in Deutschland noch nicht ein japanischen Spielfilm gesehen, der ein gewöhnliches Leben in heutigem modernen Japan zeigt. Aber die Leute hier beurteilen Japan nach diesen Filmen, weil sie von den Japanern gemacht wurden.

Es gibt noch eins, zu bemerken. Die japanische Gewohnheiten und Gebräuche passen nur in das traditionelle Leben. Als eine deutsche Familie uns in Hamburg besuchte, wunderte sie sich, daß wir wie Europäer wohnen. Sie fragte mich : “Warum setzen Sie sich nicht auf den Fußboden?” und “Warum grüßen Sie nicht nach japanischer Art?” Eine schlechte Verbindung der japanischen Gebräuche und des modernen Lebens ist nichts anders als eine Komödie. Was im japanischen Leben wichtig ist, ist immer harmonisch zu sein.

14. VIELE MIßVERSTÄNDNISSE KÖNNTEN EINFACH GELÖST WERDEN

Viele europäische Ansichten nicht nur über Japan, sondern auch über Asien sind oft falsch. Ein Mißverständnis über die alte Geschichte und die komplizierten Gebräuche und Gewohnheiten ist unvermeidlich, aber es gibt viele Mißverständnisse, die man einfach verbessern

könnte, wenn die Europäer etwas vorsichtiger mit ihrer Meinung wären. Ich will ein Beispiel davon zeigen.

Ich habe sehr oft von Europäern gehört, daß die Überbevölkerung in Asien das Leben der Asiaten zur Armut verurteilte. Ich habe hier Daten von der UNO über die Bevölkerung der Welt. (Die Jahre sind untereinander verschieden aber wir können die Daten ungefähr vergleichen)

Die Einwohnerzahl der Welt für 1964 ist 3.350 Mio. und 1.800 Mio. davon sind Asiaten. Die Einwohnerzahl von Rotchina 1960 ist 686.400 Tausend. Dann folgt Indien (1964) 471.627. Sowjet Union (1963) 224.764. Die USA (1964) 192.119. Pakistan (1964) 100.762. Indonesien (1963) 100.045. Japan (1965) 98.270. Brasilien (1964) 78.805 und Bundesrepublik Deutschland (1963) 55.430.

Die Bevölkerungsdichte pro Quadratmeter ist so : Holland 361, Taiwan 336, Südkorea 281, Japan 266, Bundesrepublik Deutschland 224, Großbritannien 222, Italien 169, Indien 155, DDR 149 und Pakistan 106. Die Bevölkerungsdichte Asiens ist 64 und die Europas 88. Nun welche Dichte ist größer, die Asiens oder Europas?

Die Europäer erklären mir, daß die Japaner sich früh verheiraten und sehr fruchtbar seien, aber ist das wirklich so?

Im Laufe der 300 Jahre der Edo-Periode, ist die Einwohnerzahl Japans immer etwa 30 Mio. gewesen. Kurz nach der Meiji Restauration, berichtete die japanische Regierung, daß die Einwohnerzahl Japans etwa 34 Mio. wäre. (Die Anbaufläche war nur 1/7 des ganzen Gebietes.) Die japanische Bevölkerung vergrößerte sich bis 1887 jährlich um 0,5% und danach um 1,6%. Als die Shōwa-Ära (von 1926) kam, vergrößerte die Bevölkerung sich sehr schnell, weil die Regierung mehr Soldaten haben wollte. Nach dem zweiten Weltkrieg, wurden viele Babys geboren, aber 1950 sank die Geburtenziffer sehr schnell. Die heutige Geburtenziffer Japans ist 1,97 pro Ehepaar. Um die gleiche Einwohnerzahl zu behalten müßte es 2,14 pro Ehepaar sein. Die kleinste Sterblichkeitsziffer in der Welt auf der anderen Seite kann man in Island finden, dann folgt Japan.

Die japanischen Männer verheiraten sich im allgemeinen im Alter zwischen 25-30 Jahren, und Frauen 20-25. Es wird natürlich als Ausnahme Damen geben, die mit 18 Jahren verheiratet sind, und Männer, die mit 35 Jahren heiraten.

15. WAS WOLLEN DIE JAPANER VON DEN DEUTSCHEN LERNEN?

Zuletzt will ich zeigen, wie die Japaner sich selbst kritisieren. Es gibt einige Probleme,

und ich glaube, daß über den Finanzzustand im meisten in Japan gesprochen wird.

Neulich habe ich an einer Diskussion teilgenommen. Die Japaner verglichen Japan mit Deutschland, und kritisierten Japan. Wir denken über das Geheimnis der wunderbaren Wiederherstellung Deutschlands so :

Als der Krieg endete, hatte Deutschland eine größere Katastrophe als die Japans. Deutschland bekam zuerst eine große amerikanische Hilfe, d.h. "Marshall Aid." die größer als die Hilfe für Japan war, aber kleiner als die für Großbritannien und Frankreich. Die Zahl der Arbeitslosen 1949 betrug etwa zwei Millionen. In jener Zeit hat die USA eine Depression gehabt, und die amerikanischen Kapitalisten legten in den Fabriken Deutschlands und Japans ihr Kapital an, weil sie dort begabte Arbeiter mit billigen Kosten bekommen konnten. Für uns war das eine sehr unangenehme Zeit.

In Deutschland gab es eine Währungsreform 1948, und dadurch wurde der Wirtschaftszustand normalisiert. Deutschland hat eigentlich eine Anhäufung von Technik und jetzt sparen die Deutschen ihr eigenes Kapital. Die Regierung hatte eine Marktwirtschaft, die Erfolg hatte. Deutschland hat auch große Bodenschätze an Eisen und Kohlen. Das übrige Problem war nur der Markt.

1950 fing der Krieg in Korea an, und die Amerikaner kauften viel aus Deutschland und Japan. In Afrika bekamen viele alte Kolonien von Europa die Unabhängigkeit, und die Leute kauften Erzeugnisse lieber aus Deutschland als aus den alten Herrenländern. Der Arbeiterlohn in Deutschland verdoppelte sich in 10 Jahre zwischen 1950-1960.

Als ich hierher gekommen bin, sah ich sehr wenige Deutsche in den Städten voller Sehenswürdigkeiten in Europa. Aber jetzt sehe ich viele deutsche Reisende überall in Europa. Mir scheint es heute, daß die Geschäftslage der Verbraucher in Deutschland sich neuerdings schnell vergrößert hat, und daß die deutsche Wirtschaft zweifellos ausgezeichnet ist.

Dieses ist eine japanische Ansicht über die Wirtschaft Deutschlands, und ich weiß nicht, ob es richtig oder falsch ist. Auf jeden Fall vergleichen die Japaner Japan mit solch einer wunderbaren Wiederherstellung.

Die Wiederherstellung Japans ist sehr ähnlich wie die Deutschlands, aber Japan ist sehr arm an Bodenschätzen, u.zw. an Eisen und Kohle, obgleich die Kohlenindustrie langsam untergeht. Wichtig ist, daß Japan nur eine geringe Anhäufung der Technik hat im Vergleich mit Deutschland, weil die moderne Geschichte Japans kürzer ist, und Japaner sparen weniger an Kapital.

Ein Deutscher baut zuerst ein Haus, und dann kauft er die Möbel. Zunächst kauft er ein

Auto, das wie ein Sohn für die Deutschen ist. Und dann kauft er einen Kühlschrank, eine elektrische Waschmaschine und einen Fernsehapparat. Er macht es richtig.

Aber ein Japaner kauft zuerst einen Fernsehapparat, eine Waschmaschine und einen Kühlschrank. Dann kauft er eine Klimaanlage und ein Auto. Und nun denkt er, wie ein Haus baut. Das ist umgekehrt.

Nach dem Krieg kauften die Japaner die neueste Technik vom Auslande und liehen sich Geld von den ausländischen Banken. Obwohl die Wirtschaft-Japans noch nicht konstant war, fingen die Japaner an, Güter zu kaufen, die nicht lebensnotwendig waren, z.B. Farbfernsehen, Auslandsreisen u.s.w. Dadurch verbesserte sich die Geschäftslage.

Endlich beschlossen wir auf dieser Diskussionsversammlung, daß die Japaner den Deutschen gut kennenlernen müssen, und wir müssen nochmal ein bescheidenes Leben führen, um das Kapital anzuhäufen. Dieses ist es, was die Japaner von Deutschen lernen wollen.

Abschnitt Elf

WODURCH SIND DIE MIßVERSTÄNDNISSE ENTSTANDEN?

Ich habe die Ursache genau untersucht, warum Japan von den Europäern mißverstanden wird. Und jetzt will ich erklären, wie sich die Mißverständnisse gebildet haben.

Fast alle Europäer haben irgend ein Mißverständnis oder Vorurteil gegen Japan, obwohl sie von Japan keine Kenntnis haben. Darüber habe ich einen interessanten Bericht gelesen.

1. LERNEN DIE KINDER DIE WAHRHEIT ÜBER JAPAN?

Vor etwa fünfzehn Jahren, las ich in einer japanischen Zeitung einen Bericht über die internationale Ausstellung von Schulbüchern. Die Japaner dachten, die Ausländer hätten eine gute Kenntnis über Japan, genau sowie die Japaner über die Ausländer sie haben. Aber die meisten ausländischen Schulbücher zeigten Japan oft falsch. Zum Beispiel berichtete ein Buch, daß Japan politisch zu China gehört, und ein anderes berichtete über die Leute und Kleidung Japans so, daß die Japaner denken mußten, es handele sich um Leute und Kleidung von irgendwo außerhalb Japans, so entstellend war der Bericht.

In der japanische Zeitschrift Bungei Shunjū vom April 1966 schrieb Professor Ryūjirō Ishida von der Universität Hitotsubashi einen Bericht über ausländische Schulbücher unter dem Titel, das erstaunliche Japan in den ausländischen Schulbüchern.

Der Professor analysiert die falschen Erklärungen in den ausländischen Schulbüchern und

teilt sie in vier Kategorien.

Erstens ist die Neigung zum exotischen. Zum Beispiel werden in vielen Büchern “Rickshaws” als das Verkehrsmittel in Tokio hingestellt. Es stimmt, daß es Rickshaws in Tokio und Kyōto noch zuweilen gibt, aber sie sind nur für die Halbwelt und die Zahl der Rickshaws in Tokio soll ungefähr einhundert betragen. (Ich weiß die Zahl nicht genau) Ein Ausländer sagte dem Professor in der Südost-Asiatischen Akademie für Geographie 1962 : “Ich habe selbst ein Rickshaw in Tokio gesehen und deshalb ist es nicht falsch, daß wir Rickshaws in unseren Schulbüchern zeigen.”

Das italienische Buch berichtete, daß der Berg Fuji von den Japanern als Platz der Götter gedacht wird, und deshalb beten dort Tausende von Pilgern im Juni und Juli, und sie besteigen den Gipfel in weißer Kleidung. Das schwedische Buch ist ungefähr ähnlich. Aber man muß vorsichtig sein, bevor man diese Erklärung glaubt. In Wirklichkeit gibt es etwa 2.000 Leute, die mit weißer Kleidung den Berg Fuji im Sommer besteigen. Aber die Zahl der Leute, die den Berg Fuji im Sommer besteigen, ist etwa 300.000. Die Japaner schreiben oft über den Berg Fuji als den heiligen Berg. Das ist ein literarischer Ausdruck, weil Fuji sehr hübsch ist. Vielleicht gibt es einige Leute, die Fuji als einen heiligen Berg ansehen, aber Fuji war niemals mit der Religion in Japan im Zusammenhang. Wir, Japaner, sind stolz auf Fuji, weil Fuji so schön ist. Ein Buch berichtet, daß die japanische Angelfischerei sehr primitiv sei. Im Nagaragawa Fluß angelt man die Fische mit einem Vogel, aber das ist eine lokale Art und man tut es mit Geschmack. Die allgemeine japanische Fischerei ist die modernste in der Welt.

Zweitens, werden die ausländischen Bücher nach veralteten Daten geschrieben. Diese Bücher zeigen niemals die alte japanische Zivilisation, als die meisten europäischen Länder noch barbarisch waren, sondern zeigen die Leute und die Trachten in der Edo-Periode, als heutiges Japan. In jener Zeit etwa vor 300 Jahren hatten die Europäer eine Blütezeit und die Japaner standen ihnen wissenschaftlich nach. Die meisten Bücher stellen die japanische Industrie nach der Meiji Restauration (1868) bis zum zweiten Weltkrieg als heutiges Niveau dar. In jener Zeit hatten die Japaner von Ausländern die neue Technik gelernt. Die fortschrittlicheren Bücher zeigen Japan nach dem Weltkrieg, aber im allgemeinen vor 1950. In jener Zeit war Japan in der schwierigsten Zeit nach der Katastrophe. Wenn man Deutschland in 1945-50 zeigt und beurteilt, daß das das heutige Deutschland ist, dann wird der Deutsche vielleicht böse sein oder lachen.

Professor Ishida zeigte viele Beispiele dafür. In den ausländischen Büchern gelten die Häl-

fte der japanischen Arbeiter als Bauern! Der Hauptexport Japans sei die Seide! Es gäbe wenig Kühe und Schafe, und keine Pferde in Japan! Als japanische Staatsflagge wird die alte japanische Marine Flagge gezeigt. Wenn wir laut der Erklärung im deutschen Buch baden wollen, dann würden alle Japaner sich verbrühen. Ein deutsches Buch erklärt: "Nur reiche Leute essen hauptsächlich Reis. Die Armen essen Getreide, Gerste und Nudeln. Die Japaner essen kein Fleisch, kein Brot, keine Butter und keine Kartoffeln, sondern Fisch auf verschiedene Art. . . ." Wenn wir die japanischen Gerichte nach der Art in diesem Buch essen müßten, verlören wir das Geschmack an den japanischen Speisen.

Diese Erklärungen sind nicht nur alt, sondern auch teilweise falsch, und nun kommt die dritte Kategorie, das ist das Übertriebene.

Das Erdbeben in Japan ist weltberühmt, und die meisten Schulbücher erklären es den Kindern. Ein englisches Buch erklärt, daß 1.500 Erdbeben jährlich in Japan geschehen, und in Tokio kann man durchschnittlich drei Erdbeben täglich erleben. Die Zahl von 1.500 ist nicht nur in diesem Buch gezeigt, sondern in allen Büchern. Die Kinder denken vielleicht, Japan sei ein sehr gefährliches Land. Diese Daten werden vielleicht von der japanischen Wetterwarte erhalten. Aber diese sind aus Berichten vom Präzisionsinstrumenten, mit welchen man auch viele Erdbeben in Europa zählen kann, die die Bevölkerung ebenfalls nicht merkt.

In Wirklichkeit kann man 5-10 Erdbeben jährlich in Tokio erleben. Dann kann man sehen, daß der Schrank und die Lampe beben und hören, daß das Fenster klirrt. Aber zur Katastrophe kommt es nicht so oft. Vielleicht einmal in einem Jahrhundert. Heute ist in Japan die kleine Stadt Matsushiro in der Nagano Provinz sehr bekannt. Das Erdbeben geschah in dieser kleinen Stadt täglich seit einigen Jahren. Aber das ist eine Ausnahme.

Nach dem französischen Buch, existiert die Bucht von Tokio nach dem großen Erdbeben 1923 nicht mehr. Aber diese Erklärung ist über 30 Jahre gebraucht worden. Ein englisches Buch erzählt, zwei Millionen Bürger starben in Tokio beim Erdbeben 1860. In der Geschichte Japans, wird kein großes Erdbeben im Jahre 1860 verzeichnet, aber in 1855 hatten wir eine große Katstrophe in Tokio, und damals starben 6.700 Bürger. Auf jeden Fall betrug die Zahl der Einwohner Tokios im neunzehnten Jahrhundert nicht zwei Millionen.

Der Franzose ist sehr romantisch, und erklärt: "Die Japaner denken, daß ihr Land auf dem Rücken eines großen Fisches liege und der Fisch versucht immer seine Last abzuschütteln." Die Japaner scherzen manchmal und sage: "Der Wels verursacht das Erdbeben durch seinen Bart." Aber niemand glaubt es. Ein indisches Buch erklärt: "Im Juni werden die Straßen von Wasser überschwemmt, und im Lande ist es unmöglich zu verkehren. Deshalb

zieht man Geta (ein Holzschuh) und schützt sich gegen den Schlamm." Vielleicht vermischen die Indier das Klima Japans mit dem Indiens.

Viertens, zeigt Professor Ishida den Fehler in der Kenntnis oder das Vorurteil des Verfassers. Es gibt viele falsche Erklärungen über Reis, den Kaiser, und die Politik Japans. Der angeblich billige Arbeitslohn Japans scheint mir weltberühmt zu sein. Denn fast alle Bücher schreiben davon. Der Engländer sagt: "Die Regierung baue die Logierhäuser für die Mädchen, die sehr wenig Arbeitslohn bekommen." Der Holländer sagt: "Die modernen Fabriken wurden mit staatlicher Unterstützung gebaut." Die polnische Erklärung ist wunderbar: "Die Abwanderung der armen Leute vom Lande, in welchem man unter der Überbevölkerung leidet, nach der großen Stadt hin, liefert eine große Arbeitskraft. Das kann für die japanische Kapitalisten den Arbeitslohn kürzen bis zur Hungersnot, welches der Trumpf des Japaners in der Konkurrenz mit den Europäern für den Markt ist." Der Franzose sagt. "Es gibt viele Arbeiter in Japan, und der Arbeitslohn ist sehr billig. Die Arbeiter Japans arbeiten im allgemeinen fast ohne Lohn."

Es ist klar, daß die japanischen Arbeiter nicht so reich sind, daß sie ohne Lohn arbeiten können. Vor dem Krieg arbeitete man oft ohne Lohn, aber man dachte nicht in diesem Fall, daß man arbeitete. Zum Beispiel, reparierte der Baumeister die kaputte Tür des Nachbarn. Wenn er es freiwillig getan hat, dann ist es unhöflich, ihm das Geld anzubieten. Die Nachbarn danken ihm herzlich, und wenn sie etwas besondere bekommen, z.B. Spezialitäten aus ihrem Heimatland, geben sie es ihm als ihren Dank für die Arbeit. Heute geht dieser Brauch unter, weil die Denkungsart der Ausländer überhand nimmt. Alles dreht sich um das Geld.

Die indischen, holländischen und deutschen Bücher zeigen das Niveau des japanischen Arbeiters relativ richtig. Der Professor kommentiert, diese Situation des Arbeiters ist nur bis zum gewissen Grade richtig, aber es gibt oft Vorurteile in der Erklärung. Ein Buch sagte: "Obgleich der Arbeitslohn in Japan zunimmt, erhöht sich die Produktivität nicht, weil die japanischen Arbeiter genau wie die Chinesen faul und unverantwortlich seien, und der Arbeitsgeber die Notwendigkeit seines Geschäft nicht richtig erkennt, und dazu kommt noch der Mangel an Kapital."

Viele Bücher beurteilen die Japaner als kriegerische Nation. Der Franzose sagt: "Die Überbevölkerung Japans vereinigt mit dem Militarismus erzeugt das Verlangen, das Landesgebiet zu vergrößern, und deshalb führte Japan Eroberungskriege gegen Rußland (1904,) China (1937) und die USA (1941.)" Nach den ausländischen Büchern, hätte Japan Ryūkyū, die Kurilen, Taiwan und andere Inseln durch Eroberungskriege bekommen. Ein englisches Buch

erklärt, daß Japan durch einen unfairen Krieg ganz Asien beherrschte, und die Alliierten hatten damals Schwierigkeiten. Die Alliierten konnten den Sieg durch die Atombomben erringen. Die Bücher, die gleich nach dem Krieg geschrieben wurden, sind oft gegen Japan eingestellt, aber das ist unvermeidlich.

Nach dem Kriege, kamen viele Spielfilme aus den gewesenen alliierten Ländern nach Japan, und zeigten den Krieg in Europa. Aber die Japaner kommentierten : “Das ist nicht wahr oder unfair. Die deutsche Armee müsse stärker gewesen sein als diese im Film gezeigt wurde.”

Professor Ishida erklärt : “Die Internationale Erziehung und das Informationzentrum in Japan untersucht die Schulbücher über die Geschichte und Geographie Japans in der Welt seit acht Jahren. Sie hat schon 2.500 Bücher von über 60 Ländern gesammelt. Wenn falsche Berichte über Japan gefunden wurden, schickte man den Verfassern das Material und Bilder, um die Berichte zu korrigieren. Viele Verfasser waren sehr freundlich und fair, aber es gibt noch einige Verfasser, die niemals die falschen Berichte verbessert haben.

Im allgemeinen, sind die Verfasser von Skandinavien und den Entwicklungsländern die neue Daten übernehmen. Ich habe hier nur die falschen Berichte in den ausländischen Bücher gezeigt, aber ich meine nicht, daß die ausländischen Geographiebücher immer schlecht sind. Die japanischen Geographiebücher zeigen immer die neueste Statistik, und deshalb gibt es keine Möglichkeit, Fehler zu machen. Aber die Erklärungen darin sind oft langweilig für die Kinder. Die ausländischen Bücher sind vielfach den Kinder interessanter. Sie wollen das Leben der Ausländer erzählen, und deshalb machen sie oft Fehler.

Ich kann nicht mit Bestimmtheit sagen, ob wir darauf stolz sein sollen oder nicht, daß unsere Geographiebücher wissenschaftlich keine Fehler haben. Unsere Bücher sind vielleicht statistisch gut, aber keine wirklichen Schulbücher.”

Nun kann ich verstehen, warum man so falsch über Japan in Europa denkt. Die Kinder lernen oft völlig Falsches über Japan, und dadurch entsteht eine falsche Meinung und oft hört man, daß jedermann wisse, wie man in Japan lebt. Bekanntlich bleiben die Eindrücke der Kindheit sehr fest im ganzen Leben.

2. IST DIE PRESSE IMMER RICHTIG INFORMIERT?

Am Anfang dieses Jahres hatten wir viele Katastrophen durch Flugzeugunfälle in der Welt. Wenn ich mich nicht irre fiel zuerst ein Flugzeug der Lufthansa in Bremen und alle Passagiere und die Mannschaft davon wurden getötet, und gegen den Gipfel des Mont Blancs

stieß ein indisches Flugzeug und alle Leute wurden auch getötet.

Am 4. Februar fiel ein japanisches Flugzeug, Boeing-727, das zum "Zennikkū" (All-Japan-Lufttransport) gehörte, in die Tokio Bucht, und alle Leute wurden dabei getötet. Drei Boeing-727 Maschinen waren schon in den USA in kurzer Zeit auch gefallen und deshalb gab es ein Gerücht, daß die Boeing-727 gefährlich wäre. Kurz nach dem Unfall in der Tokio Bucht, sagte ein japanischer Professor, der Autorität im Luftgebiet ist : "Die Boeing-727 ist eine ausgezeichnete Maschine, obgleich sie bei der Landung etwas schwerer als die anderen zu bedienen ist. Diese Maschine ist niemals eigentlich gefährlich."

Eine Putzfrau kam und sagte mir : "Haben Sie die Zeitung gelesen? Der japanische Pilot ist so schlecht, daß die Maschine immer abwärts und aufwärts fliegt und bald einen großen Unfall verursachen wird. Wenn Sie deshalb nach Japan zurück fliegen, nehmen Sie niemals ein japanisches Flugzeug, sonst werden Sie getötet."

Ich bin auch ein Student-Pilot gewesen, und habe einige Kenntnisse über Flugzeuge. Die Ursache von einem Flugzeugunfall kann man selten vorher wissen. Im allgemeinen kann man sie nur vermuten nach einer langen Untersuchung. Trotzdem, scheint es mir, daß eine Zeitung hier den japanischen Piloten verdächtigt hat, schuldig zu sein, u.zw. direkt nach dem Unfall und ohne eine Untersuchung.

In Japan folgten die großen Flugzeugunfälle, u. zw. am 4. März, d.h. genau einem Monat später, stieß ein canadisches Flugzeug, Douglas DC-8, gegen einen Wellenbrecher im Flughafen Tokios. 64 von 72 Leuten, die in der Maschine waren, wurden getötet. Am folgenden Tage explodierte eine Boeing-707 von BOAC über den Berg Fuji und alle Leute wurden ebenfalls getötet.

Die Japaner klagten den Himmel an und sagten selbst : "Sind wir denn verflucht?" Sie suchten einen Überlebende, sammelten die Leichen und setzten die Bergungsarbeiten auf dem Berg Fuji auch in der Nacht fort. Die canadische und britische Regierungen schickten den Japanern ein Telegramm und dankten darin den Japanern für ihre Rettungsarbeiten und äußerten ihr Bedauern über die Unfälle. Spezialisten kamen aus Canada und England nach Japan, um an der Zusammenarbeit teilzunehmen in Bezug auf die Untersuchung der Ursache der Unfälle.

Mein Freund in Hamburg aber sagte mir : "Eine Zeitung berichtete, daß die Japaner zum Flug unberechtigt sind, weil sie schlecht in der Qualität seien und sie englisch nicht genügend verstehen können."

Solch eine schlechte Meinung kann man oft in einer der Zeitungen aller Länder der Welt

finden. Es gibt deshalb kein Problem darüber. Ein anderer Freund sagte : "Das ist wahr, daß solch eine schlechte Meinung in einer Zeitung stand, aber auf der anderen Seite berichtete eine Zeitung, daß diese zwei Unfälle keine Beziehung zu den Japanern haben, sondern zwei ausländische Maschinen die Katastrophen in Japan gehabt hatten und die Japaner sind das Opfer.

In Deutschland fielen viel Jetjäger, Star-Fighter, während der vergangenen zwei Jahren und sehr viele Piloten wurden getötet. Die japanischen Zeitungen berichteten darüber auch, aber keine Zeitung beurteilt deshalb den deutschen Piloten schlecht.

Als das englische Flugzeug über dem Berg Fuji explodierte, habe ich Folgendes im Deutschen Fernsehen gehört und in den Zeitungen gelesen : Die Maschine zerbrach in zwei Teile und fiel auf den Berg Fuji. Zwischen den Überresten gab es auch ein Überrest, der wahrscheinlich ein Teil einer japanischen Maschine war. Solch ein Bericht deutet an, daß ein japanisches Flugzeug mit der britischen Maschine zusammengestoßen sei. Keine japanische Maschine stieß mit der BOAC zusammen. und es gab auch wirklich keine Überreste einer japanischen Maschine auf dem Berg Fuji.

Ich habe Folgendes in einer japanischen Zeitung gelesen und auch von einem japanischen Berichtersteller gehört : Kurz nach der Katastrophe hatten wir ein Gerücht, daß ein amerikanisches Militärflugzeug mit der Boeing zusammengestoßen wäre. Aber die amerikanische Militärverwaltung in Japan erklärte sofort, daß keine amerikanische und japanische Militärmaschine damals in der Nähe vom Berg Fuji geflogen waren. Vielleicht verbreitete sich dieses Gerücht nach Europa, und die amerikanische Maschine wurde die japanische, ehe man es bemerkte. Ich weiß nicht, ob das Deutsche Fernsehen und die Zeitung ihre falsche Bericht später korrigierten oder nicht.

Drei Monate später, vergessen die Leute die Einzelheiten der Katastrophen, und in einer Ecke des Gedächtnisses der Leute blieb nur eine undeutlicher Eindruck, daß Japan ein gefährliches Land sei, weil dort drei Maschinen in einem Monat zusammenstoßen und viele Leute getötet sind.

Ich habe oftmals von den Leuten hier gehört, daß Japan immer viele Katastrophen habe und die japanischen Maschinen sehr gefährlich seien. Die Zennikkū(All-Japan-Lufttransport) ist eine lokale Luftverkehrsgesellschaft in Japan und die Japan-Air-Line ist eine internationale und auch inländische Luftverkehrsgesellschaft von Japan. Als die Japaner ihre Luft-herrschaft in ihre Hände zuerst nach dem Kriege zurückbekamen, waren alle Piloten Amerikaner, und die Flughäfen und den Luftverkehr kontrollierten amerikanische Soldaten. In

jener Zeit, das war 1952, hat eine Maschine von der Japan-Air-Line einen Unfall gehabt und hatte eine große Katastrophe. Seit Japan aber die Unabhängigkeit wieder bekommen hatte, hatte die Japan-Air-Line bis heute d.h. 8. August 1966, keinen Unfall mit tödlichem Ausgang. Das ist ein wirklich stolzes Ergebnis.

Wenn man deshalb solch eine üble Meinung verbreitet, daß die Qualität der Japaner im Flug schlecht ist, mit einem Beispiel der Katastrophe von einer lokalen Luftverkehrsgesellschaft, dann muß man das als Verleumdung betrachten. Auf jeden Fall wird auf diese Weise ein Mißverständnis geschaffen.

3. BOSHAFFE LEUTE SIND GEFÄHRLICH

Zuletzt will ich ein Beispiel geben, das von boshafte Leuten geschaffen wurde. In der japanischen Zeitung "Nippon Keizai Shimbun" von 2. Juli 1965 berichtete man, daß ein schlechter japanischer Film beim Filmwettbewerb Japan Schande mache.

Herr G. M. der Präsident des H. Films, besuchte letztes Jahr Japan und hat einen japanischen Film nach Berlin mitgebracht. In Japan gibt es etwa fünf Filmgesellschaften, die eine Organisation bilden, und dazu gibt es zahllose kleine Filmproduktionen. Es gibt in Japan viele kleine Filmproduzenten, die nur sogenannte "Pinkfilme" drehen. Diese Filme werden niemals in den erstklassigen Kinos gezeigt. Das, was Herr M. aus Japan mitgebracht hat, war so ein Pinkfilm. Der Film wurde Herrn M. von Kantō Movie, d.h. der Verteilungsfirma der Wakamatsu Produktion, gegeben.

Als die japanische Filmorganisation erfuhr, daß Herr M. diesen Film im Berliner Filmwettbewerb ausstellen wollte, als einen Film, der die japanischen Filmproduktion repräsentiert, waren die Japaner erstaunt und haben Herrn M. gebeten, den Film nicht auszustellen, weil dieser Film nicht ernst zu nehmen war. Herr M. antwortete nicht. Am 16. Juni 1965 schickten die Japaner ein Telegramm an die Kanzlei des Wettbewerbs, um den Film nicht zeigen zu lassen. Aber die Deutschen schwiegen auf die wiederholten Bitten der Japaner, und zeigten den Film am 30. Juni im Wettbewerb. Der Erfolg war selbstverständlich negativ.

Die Zuschauer tadelten den Film und viele Leute verließen den Saal während der Vorführung. Die Zeitungen in Berlin und in der Bundesrepublik Deutschland tadelten den Film auch. Ich habe auch im Deutschen Fernsehen die Preisverteilung gesehen, und daß ein amerikanischer Prüfer die Japaner bemitleidete und sagte, daß es eine Mißwahl in bezug auf Filme gibt.

Dieses Jahr haben die Japaner keinen Film nach Cannes und Berlin geschickt, weil sie

keinen guten Film für den Wettbewerb hatten, berichtete die japanische Zeitschrift "Shūkan Shinchō" am 2. Juli, 1966, und die japanische Filmorganisation entschied, den Berliner Wettbewerb dieses Jahres totzuschweigen. Das japanische Generalkonsulat wollte, daß die japanische Filmproduktion an dem Berliner Filmwettbewerb d.J. auch teilnehme, und schickte wiederholte Telegramme an das Außenministerium in Japan. Die Kanzlei des Wettbewerbs bat die Japaner auch am Wettbewerb teilzunehmen. Aber die japanische Filmorganisation ist immer noch böse wegen des Ereignisses vom vorigen Jahr, und antwortete nicht.

Endlich hat ein Japaner seinen Dokumentarfilm "Nō" nach Berlin mitgebracht. Er heißt Herr Nakamori und ist der Veranstalter vom Nō-Spiel in Kamakura. Die japanischen Filmleute schlugen das Berliner Angebot zuletzt ab. Das ist ein sehr unglückliches Ereignis. Die Japaner haben wie Unmündige behandelt aber gleichzeitig ist es nicht zu verschweigen, daß die Berliner sehr unfair und boshaft den Japanern gegenüber letztes Jahr gehandelt hatten.

Boshafte Leute existieren in den allen Ländern, und deshalb will ich sie nicht kommentieren, aber ich möchte sagen, daß solche Leute gut gesinnten Zuschauern ein falsches Bild von einem Lande geben. Die Zahl solcher Leute ist natürlich sehr gering, aber sie sind sehr gefährlich für die Freundschaft zwischen den Ländern.

Ich habe drei Beispiel gezeigt, wie Mißverständnisse entstehen können.

Abschnitt Zwölf

WIE SCHWER SIND MIßVERSTÄNDNISSE ZU BESEITIGEN

Mißverständnisse können zwischen allen Ländern, allen Leuten und allen Familien existieren. Ein Mann kann oft nicht verstehen, was er ist, wie er ist... u.s.w. Zwischen den europäischen Ländern gibt es vielleicht viele Mißverständnisse. Zwischen Europa und Asien gibt es mehr Mißverständnisse. Ich habe viele Mißverständnisse gezeigt, die zwischen Europäern und Japanern bestehen, aber was ich erklärt habe, sind nur die besonderen Mißverständnisse, die die Europäer den Japanern gegenüber behalten.

Ich denke nicht, daß alles dieses eine Krise für die Freundschaft zwischen den Europäern und Japanern ist. Einige davon sind eher lustig und teilweise richtig. Ich glaube aber, daß eine wirkliche Freundschaft niemals auf Mißverständnissen bestehen kann.

Es gibt ein Mißverständnis, das sehr einfach korregiert werden kann. Zum Beispiel ist die Frage "Haben Sie eine Eisenbahn in Japan?" sehr einfach zu beantworten ist. Ich zeige ein Bild und das ist genug. Aber es gibt auch Mißverständnisse, die sehr schwer zu beseitigen

sind. Wenn ich diese Mißverständnisse ungenügend erkläre, dann entstehen andere Mißverständnisse.

Ein Europäer sagte mir : “Jetzt wissen selbst die Kinder, daß die japanische Eisenbahn am modernsten in der Welt ist,” und mir wurde gesagt : “Achten Sie doch nicht darauf, was wenige ungebildete Leute sagen.” Aber er hat auch eine falsche Ansicht über Japan, daß das Niveau des Lebens und der Erziehung in Japan sehr niedrig sei. Ein anderer Europäer, der eine bessere Kenntnis des heutigen Japans hat, lachte ihn aus, und beurteilte Japan als gestern schlecht aber heute sehr gut. Aber für mich ist alle dieses falsch. Es gibt natürlich einen Unterschied der Kenntnisse zwischen ihnen. Herr B hat eine bessere Kenntnis als Herr A, und Herr C eine bessere als Herr B, obwohl alle Herren sich irren.

Ein japanischer Freund sagte mir : “Wir wohnen in Deutschland und sind mit dem Leben hier zufrieden. Alles dieses kommt aus der Freundschaft der Deutschen uns gegenüber, und deshalb wollen wir nicht die Deutschen und andere Europäer kritisieren, und wir müssen Geduld mit solchen unangenehmen Ansichten haben.”

Ein anderer Freund sagte : “Denken Sie mal. In Japan gibt es noch viele Dinge, die bald gebessert werden müssen, und deshalb können wir gegen die europäische falsche Ansicht über Japan nicht auftreten.”

Eine deutsche Dame erklärte mir : “Die Frage, ‘Haben Sie solche Eisenbahnen in Japan?’ bedeutet, ob die japanische Eisenbahnen wie die europäischen es sind oder nicht, und das bedeutet niemals, ob Japan eine Eisenbahn hat oder nicht.” Eine andere sagte : “Behalten Sie nicht im Herzen, was ein paar Dumme gesagt haben!”

Im Abschnitt eins habe ich viele naive Fragen von Leuten, die ein vollkommene Unkenntnis über Japan hatten, gezeigt. Jetzt will ich zeigen, was meine Freunde und Bekannten in Europa mir sagen in Bezug auf Japan oder Tokio. Ich meine, daß sie eine gute Kenntnis über das Nachtleben in Tokio haben.

Als ich die europäischen Städte besuchte, zeigten sie mir Kirchen, Schlösser, Flüsse, Parks und vieles andere Wertvolle. Sie brachten mich in gute Restaurants und sagten : “Bitte dieses nicht zu vergleichen mit Tokio. Wir haben leider keines wie in Tokio.” Wenn ich sie fragte, wohin ich in der Nacht gehen sollte, antworteten sie immer so : “Sie sind in Tokio geboren und dort aufgewachsen, nicht wahr? Wir haben leider nichts, was wir solch einem Mann in der Nacht empfehlen könnten. Wollen Sie einen Nachtclub besuchen? Meinen Sie einen wie ein Nachtclub in Tokio, in welchem Frank Sinatra sang? Sie scherzen! Haben Sie Durst? Dann können Sie ein Gasthaus besuchen, aber ich kann nur 30 Minuten garantieren, bevor

Sie überdrüssig werden. Sie gehen besser zum Hotel zurück und lesen ein Buch. Ich will Ihnen ein interessantes Buch leihen. Vergessen Sie nicht, daß das Nachtleben in Europa sehr gesund ist!"

Schade! Sie sind mir immer höflich ausgewichen und ich weiß noch nicht, wie interessant das Nachtleben Europas ist.

Ich dachte auch an meine europäischen Freunde, an meine Bekannten und Nachbarn, und viele andere, die so freundlich und hilfsbereit mir gegenüber sind. Es gibt auch Leute, die richtig über Japan urteilen, und die Leute, die Japan wenig kennen aber nicht zu gering darüber denken, obwohl es ihrer sehr wenige sind.

Wenn ich die falschen Ansichten, die manche Europäer über Japan haben, zeigen wollte, dann wäre ich sehr unhöflich den Leuten gegenüber, die freundlich zu mir sind. Und deshalb dachte ich, daß ich lieber schweigen sollte. Aber ich dachte plötzlich daran, daß über die Hälfte der ganzen Bevölkerung der Welt Asiaten sind. Es scheint mir, daß die meisten Europäer auch eine falsche Ansicht den Asiaten gegenüber haben, und sie beurteilen die Asiaten immer zu gering.

Es ist sehr unglücklich, daß Nationen wie die Europäer, die eine hohe Zivilisation haben, meistens eine falsche Ansicht über die größte Zahl der Leute in der Welt haben. Das Mißverständnis muß also so schnell wie möglich beseitigt werden. Mir scheint es auch, daß die Europäer Japan besser als die anderen asiatischen Ländern kennen. Viel Leute identifizieren Korea und Indochina.

Ich habe leider noch nicht die asiatischen Länder außer Japan besucht, und deshalb habe ich keine Ansicht über ganz Asien. Aber ich kann beweisen, daß die europäische Ansicht über Japan ganz falsch ist, weil ich selbst ein Japaner bin. Und Japan ist eine der asiatischen Länder. Dann vielleicht, hoffe ich, daß die Leute anfangen zu denken, daß die jetzige Ansicht über Asien nicht immer richtig ist.

Ich habe auch schon bemerkt, daß die Europäer sehr eifrig die anderen Leute kennenlernen wollen. Zum Beispiel täuschen die Deutsche und die Japaner ihre Studenten untereinander während dieser Sommer Urlaubszeit aus, um beide Länder kennenzulernen. Beide Regierungen unterstützen die Kosten, aber nicht genug. Ich habe in einer japanischen Zeitung gelesen, daß die Finanzwelt Deutschlands eine große Geldbeihilfe gegeben hat.

Es gibt ohne Zweifel Anstrengungen vieler Europäer, um Japan richtig kennenzulernen, zu beurteilen und zu zeigen, die kann ich nicht vergessen. Die Japaner haben Vorteile und Fehler, und sie wollen immer die Kritik von den Ausländern über die Fehler von den Japan-

ern hören. Aber das, was ich hier von den Europäern gehört habe, trifft das Richtige nicht immer.

Die Leute, die mir die naiven Fragen gestellt haben, sind meisten freundlich und ebenso die Ratgeber. Sie zeigen mir immer die Sachen, die sie am modernsten und am besten in der Welt finden. Sie zeigen die Eisenbahn, die Krankenhäuser, die Universitäten in Europa und geben uns einen Rat : "Lernen Sie fleißig. Wir wünschen, Japan könnte alles dieses bald haben."

Wenn sie uns einen richtigen Rat über das Wohnungsproblem, die Verkehrshölle und die Prüfungshölle geben könnten, dann danken wir ihnen sehr und wir wollen ihnen zuhören. Die Japaner sind sehr wenig begab für ausländische Sprachen, besonderes macht ihnen das Sprechen Schwierigkeiten.

Europa hat dazu noch vieles, was die anderen Leute lernen könnten. Es ist aber wichtig zu wissen, daß das, was die Japaner von ihnen lernen wollen, keine allgemeinen fundamentalen Kenntnisse sind, sondern die Japaner wollen von ihnen lernen, was in Europa am meisten entwickelt ist. In Westeuropa versuchen die Länder ihre Grenzen wegzuräumen und eine gemeinsame Gesellschaft aufzubauen. Das ist ein fortschrittlicher Plan und auch ein Vorbild für die Asiaten. Die Japaner wollen immer europäische Musik, Oper, Mode, Malen und vieles anderes von den Europäern lernen. Jeden Rat für alles dieses heißen die Japaner Willkommen.

Jetzt ist es an der Zeit, den Schluß meiner Erklärung zu geben. Die Europäer sind sehr eifrig, das Leben der anderen Leute zu studieren, aber durch eine Schwierigkeit haben sie oft eine falsche Ansicht. Auf der anderen Seite sind die Japaner sehr passiv in bezug auf solch eine falsche Ansicht über Japan selbst, obgleich Japan ein Land ist, welches sehr schwer zu verstehen ist für andere Nationen.

Ich weiß nicht, wie lange noch diese Ansicht dauern wird. Ich bemerke schon, daß die europäische Ansicht über Japan jährlich besser geworden ist. Trotzdem, gibt es eine große Schwierigkeit, die man immer findet, wenn man die falsche Ansicht korregieren will. Zum Beispiel, sagten einige Leute, daß ich mich ganz irre, weil es keine solche falsche Ansicht in Europa gibt. Ich denke auch, daß ich sehr wenig über Europa weiß und vieles darüber mißverstehe. Aber ich kann bestimmt sagen, daß solch eine falsche Ansicht in Europa existiert, und ich kann auch wohl sagen, daß alle Europäer, die ich bis heute kennengelernt habe, eine mehr oder weniger falsche Ansicht über Japan haben, wie ich bereits gezeigt habe. Es gibt keine Beziehung zwischen der falschen Ansicht über Japan und meiner Unkenntnis oder

Mißverständnis über Europa.

Ich habe zum Beispiel das Wort "Budda-Tempel" benutzt. Ein Mann sagte mir, das müsse die Kirche sein, oder der Schrein. Wir haben dennoch darüber diskutiert, ob das Wort Tempel richtig sei oder nicht, und ich konnte nicht über den Unterschied zwischen dem Budda-Tempel und Shintō-Tempel erklären, d.h. wir schweiften vom Thema ab. Ich wollte zum Thema zurückkehren, aber ich konnte nicht genügend deutsch sprechen. Einige Leute schienen deshalb zu denken, daß ich eine falsche Ansicht über die Meinung der Europäer in bezug auf Japan schaffe oder schaffen wolle.

Andere Leute sagten mir : "Herr Ohashi, Sie denken, daß alles in Japan besser sei als in Europa und am besten in der Welt." Ich denke niemals so, aber sie behaupteten das, und wir fingen an, darüber zu diskutieren. Auch wenn ich sie von der Richtigkeit meiner Meinung überzeugen konnte, wurden wir müde, um über das Hauptthema zu sprechen.

Die falsche Meinung der Europäer über Japan geht bunt durcheinander, und ich bin oft hoffnungslos, wo ich anfangen soll, um das Mißverständnis zu beseitigen. Dazu sind manche falsche Ansichten oft teilweise richtig. Aber das Bild, das der Europäer sich von Japan macht, ist überhaupt falsch.

Vielleicht nach 50 Jahre werden die Europäer den Japanern sagen, daß die Japaner eine falschen Ansicht Europa gegenüber haben. Es scheint mir, daß wir alle Menschen in dem Tal zwischen den Bergen, d.h. gutes Verständnis und Mißverständnis, uns befinden und ich möchte, daß alle den ersteren Berg besteigen.

— ENDE —

2 Hamburg-Wandsbek
Kuehnstr. 114
den 21. November 1966

An das
Hamburger Abendblatt
2 Hamburg 36
Kaiser-Wilhelm-Str. 6

An den Herrn Chefredakteur

Sehr geehrte Herr!

Ich möchte mich entschuldigen, daß ich Ihnen plötzlich ein Manuscript schicke.

Ich bin ein Japaner, der etwa vier Jahren in Hamburg wohnt und bald nach Japan zurückkehren will. Während meines Aufenthalts in Deutschland habe ich vieles kennengelernt, und insbesondere hat es mich interessiert, daß es große Mißverständnisse zwischen dem Osten und dem Westen gibt. Ich habe auch einige Berichte über Japan gelesen, die von den europäischen Berichterstattern geschrieben wurden, und habe bemerkt, daß diese im allgemeinen das Exotische hervorhoben, und dadurch die Mißverständnisse nicht immer gelöst haben.

Obwohl ich die deutsche Sprache noch nicht vollendet beherrsche, habe ich in gewissen Grenzen diese falschen Ansichten über Japan beantwortet, und ich glaube, solch eine Arbeit könne zum besseren Verständnis zwischen unserem beiden Völkern beitragen, wenn sie mit Hilfe einer großartigen Massenkommunikation von den Leuten gelesen werden kann.

Bitte, lesen Sie mein Manuscript durch, und falls Sie meiner Meinung zustimmen können, veröffentlichen Sie es, bitte, durch Ihre Zeitung oder Ihre Publikation (in Buchform.)

Ich habe sie in der Art eines Detektivromans geschrieben, d.h. mit einzelner "Hint." Deshalb möchte ich Sie bitten, zu verstehen, daß meine Erzählung nicht verkürzt oder verändert werden soll, die Fehler in Bezug auf die deutsche Sprache ausgenommen. Sonst entsteht ein schiefes Bild, weil die falschen Ansichten über Japan sehr kompliziert sind.

Wenn mein Manuscript Sie nicht interessieren sollte, dann bitte schicken Sie es mir zurück. Ich wohne in der Kuehnstraße bis zum 4. Dezember, 1966, und danach können Sie es mir per Adresse bei Herrn Gintarō Sugiyama, 12-21 Kita-5-chome, Ohmori, Tokio, Japan senden.

mit vorzüglicher Hochachtung,

(Shinichiro Ohashi)

den 23. Februar 1967

An das
Hamburger Abendblatt
2 Hamburg 36
Kaiser-Wilhelm-Str. 6

An den Herrn Chefredakteur

Sehr geehrte Herren,

Am 21. November 1966, habe ich Ihnen mein Manuskript "Das Tal zwischen den Höhen 'gutes Verständnis' und 'Mißverständnis'-Japan, das zu wenig bekannt ist." mit Einschreiben geschickt, und danach habe ich von Ihnen keine Auskunft mehr darüber bekommen bis heute.

Wenn mein Manuskript Sie nicht interessieren sollte, dann bitte schicken Sie es mir zurück wie ich in meinem Brief vom 21. November geschrieben habe.

Ich danke Ihnen schon jetzt für Ihre Mühe. Hoffentlich höre ich bald von Ihnen.

Mit freundlichem Gruß

(Shinichiro Ohashi)

21 March 1967

Mr. Ambassador Franz Krapf
German Embassy
4-5-10, Minami-Azabu
Minato-ku, Tokyo

Dear Sir,

I take the liberty in writing to you with the hope that I may be able to receive your special favour regarding my problem which occurred in Germany.

I was in Hamburg for four years, namely, from December 1962 to December 1966. During this period I experienced life in Germany and learned many things. Among those things which I learned there, misunderstanding between the East and the West- for instance, the picture of Japan which German people hold is not always right and of course vice versa also in Japan- has especially interested me.

Therefore, I believed that my explanation about such misunderstanding could be quite useful for a better understanding between our two countries.

At first, I began with learning German language at the Berlitz School in Hamburg, because I had not learned it in Japan. Two or three hours of lessons a week were not enough for mastering German quickly, but anyway I started writing a story in June 1965 under the title, das Tal zwischen den Höhen "gutes Verständnis" und "Misverständnis" -Japan, das zu wenig bekannt ist.

It took a long time, and my German teacher was very kind to me and cooperative . In

August 1966 I finished 128 pages of my draft. Then my teacher and I exerted our utmost to correct the sentences so that the German readers could easily understand my beginner's German.

However, we could not check all the sentences before November, and I had to leave Hamburg for Japan during the first week of December. I sent then my manuscript to Hamburger Abendblatt, a well known evening newspaper in Hamburg, by registered mail. (Please refer to the enclosed copy of my letter to Abendblatt as of November 21, 1966 as well as a receipt given by the post office.)

Two months passed but I heard no news from them. I wrote them again on 23 February 1967 (please refer to the attached copy of my letter) asking for comments from them or to return my manuscript, but I regret that I have received no information from them by this date.

As I am now living in Tokyo, I have no other way to get back my manuscript than writing to them, yet I find that this way is no more effective. I have spent a long time and the cost of a few thousand German Marks for this manuscript, and now I am afraid that Hamburger Abendblatt may make unexpected use of my manuscript and cause further development of misunderstanding about Japan.

Such being the case, I beg you to render a special favour on this matter, and ask Hamburger Abendblatt to return my manuscript to me as soon as possible.

Sincerely wishing for your assistance on this matter,

Yours faithfully,

Enclosures :

Copy, my ltr to H.A.,21/Nov
and P.O.receipt

Copy, my ltr to H.A.,23/Feb

Shinichiro Ohashi

POSTANSCHRIFT : 2000 HAMBURG 36 • POSTFACH 566

TELEFON: 34 91 91

DURCHWAHL: 34 91 9

Herrn

Shinichiro Ohashi

12-2 Kita 5-chome

Ohmori, Ohta-ku

Tokyo/Japan

Hamburg, den 23. März 1967 ⁽²⁷⁾

Sehr geehrter Herr Ohashi,

das uns von Ihnen überreichte Manuskript würde ein Buch füllen ; für den Abdruck in einer Zeitung ist es schon seiner Länge wegen ganz ungeeignet. Im übrigen glauben wir, daß gerade in Hamburg eine viel bessere Kenntnis der japanischen Verhältnisse herrscht als in anderen Teilen Deutschlands. Jedenfalls können wir uns kaum vorstellen, daß hier in unserer Stadt so viele schiefe Urteile über Ihr Land abgegeben werden sollten.

Leider sehen wir aus beiden Gründen nicht die geringste Möglichkeit, den Raum zum Abdruck in unserer Zeitung zu finden. Wir geben Ihnen daher Ihr Manuskript mit Dank zurück. Es wird heute mit gesonderter Post an Sie abgesandt.

Mit freundlichen Grüßen

HANBURGER ABENDBLATT

Chef-Sekretariat

N. Lene

Botschaft

der

Bundesrepublik Deutschland

Tokyo

Tokyo, den 10. April 1967

Herrn

Shinichiro Ohashi

12-2 Kita 5-chome

Ohmori, Ohta-ku

Tokyo

Sehr geehrter Herr Ohashi!

Ihrem Wunsche entsprechend habe ich am 30. März an das 'Hamburger Abendblatt' geschrieben und gebeten, Ihnen und mir über Ihr Manuskript Nachricht zu geben. Sobald ich Antwort erhalte, werde ich Sie sogleich informieren.

Mit freundlichen Grüßen

Im Auftrag

Dr. H. Schwalbe

Pressereferent

Tokyo, den 12. April 1967

Botschaft

der

Bundesrepublik Deutschland

Tokyo

Herrn

Shinichiro Ohashi

12-2 kita 5-chome

Ohmori, Ohta-ku

Tokyo

Sehr geehrter Herr Ohashi!

Wie mir soeben das Chefsekretariat des Hamburger Abendblattes mitteilt, ist das von Ihnen angemahnte Manuskript am 23. März 1967 per Einschreiben an Sie abgegangen. Ich hoffe, dass damit Ihre Sorgen behoben sind.

Mit freundlichen Grüßen

Im Auftrag

Dr. H. Schwalbe

Pressereferent

German Embassy

CPO Box 955

Tokyo

Attn : Dr. Hans Schwalbe,

Pressereferent

Tokyo, 14 April 1967

Dear Dr. Schwalbe,

I have received your kind letter of April 12 together with another of April 10, for which I thank you.

Please find an enclosed copy of the letter from Messrs. Hamburger Abendblatt, which informed me that they were sending my manuscript back to me, and I am quite surprised by your quick action. The said manuscript, however, has not returned to me by this date, and I presume that it was sent by slower post.

I will report to you when I am actually in receipt of my manuscript. Thanking you, meanwhile, for your kind and prompt assistance to this matter, I am.

Yours faithfully,

Enclosure

Shinichiro Ohashi

den 27. Mai 1967

Herrn

Axel Springen & Sohn
2 Hamburg 36, Postfach 566
Bundesrepublik Deutschland

An das Chef-Sekretariat

Sehr geehrter Herr Lene!

Letzte Woche ist mein Manuskript gluecklich mit dem Geruch von Desinfektiosmittels hier angekommen, und ich moechte Ihnen mein herzlichen Dank dafuer sagen.

Jetzt moechte ich auf Ihren Brief vom 23. Maerz antworten. Sie haben darin gesaget : "Jedenfalls koennen wir uns kaum vorstellen dass hier in unserer Stadt so viele schiefe Urleile ueber Ihr Land abgegeben werden sollten."

Trotzdem, wage ich zu behaupten, dass die meisten Japaner in Hamburg meiner Meinung sind in bezug auf die Missverstaendnisse ueber Japan, und die meisten Japaner auch langsam die falsche Erkenntnis der Europaeer ueber Japan bemerken.

In meinem Manuskript habe ich die ausserordentlichen Beispiele ausgenommen. Zum Bei-

spiel redete mich ein Junge in einem Lokal an der Universitaet Hamburg an, und er nannte sich Student und glaubte ich sei auch ein Student. Das war im Winter 1963. Wir hatten schon getrunken und redeten auf Englisch, vielleicht wollte er von mir Englisch ueben, obwohl ich nicht so gut Englisch konnte. Er sagte mir auf sehr schlechtem Englisch : “Lernen Sie fleissig und mit den Stolz! Dann koennen Sie schnell uns Europaeer erreichen. Wir wollen allen Leuten helfen. Wir unterscheiden niemals zwischen Japanern, Chinesen, Koreanern, Indonesiern oder anderen Asiaten und Afrikanern.”

Ein solches Erlebnis habe ich mehr als einmal gehabt, aber verglichen mit den anderen Meinungen der Deutschen, ist das eine Ausnahme. Uebrigens ist es zweifelhaft, ob er wirklich ein Student war oder nicht. Wenigstens schien er kaum ein gewoehnlicher Student zu sein.

Ich habe nach Moeglichkeit solche schiefen Meinungen von meinem Manuskript ausgenommen, ebenfalls die, die laecherlichen und laeppischen.

Zum Beispiel, las man “Alle Frauen in der Welt” in einer deutschen Zeitschrift: (Ich habe schon vergessen ob “Stern” oder “Quick”) “Die indischen, russischen, japanischen, . . . Frauen koennen vier Ehemaeenner haben.” Sie zeigte das Bild einer indischen Frau mit den vier Maennern und vielen Kindern. und erzaehlte : “Diese Kinder kennen nicht, welcher Mann ihren Vater ist.” Ich habe auch eine Erzaehlung ueber die Geishas in “Alle Frauen in der Welt,” gelesen. Sie war teilweise wahr, aber ich konnte kaum zustimmen.

Ich habe natuerlich solchen Unsinn in meinem Manuskript nicht kritisiert. Ich habe nur auf Erlebnisse, die die deutsche Meinung ueber Japan zeigen, hingewiesen, obwohl es verschiedene Stufe gibt.

Ich habe nach Moeglichkeit die Nachrichtensquelle gezeigt, z. B., UNO Statistik, Name der Zeitschrift, Zeitung, Buch etc., dann koennen Sie sich ueberzeugen, ob ich mich irre oder nicht. Ich habe eine schiefe Urteile ueber die Qualitaet der japanischen Piloten in Abschnitt 11 : Wodurch sind die Missverstaendnisse entstanden, (2) Ist die Presse immer richtig informiert, Seite 120-122,⁽²⁸⁾ vorstellte, ohne den Namen der Zeitungen anzugeben. Aber wenn Sie “Bild am Sonntag, Feb-Maerz 1966, vorsichtig lesen wollten, dann koennten Sie einfach finden, dass ich die Wahrheit geschrieben habe. Ich glaube, dass das Bild am Sonntag von Ihrer Firma herausgegeben wird.

Im uebrigen, hatte ich schon in meinem Manuskript, Abschnitt 12 : Wie schwer sind Missverstaendnisse zu beseitigen, Seite 125-128, geschrieben, was Sie in ihren Brief vom 23. Maerz 1967 mir widergesprochen haben. Endlich bestaetige ich wieder, wie schwer die Wahrheit zu veroeffentlichen.

Ich moechte Ihnen noch etwas berichten. In Europa bin ich vielfmals gereist; von Norwegen nach Griechenland, von Spanien nach Czechoslovakai, und da hatte ich viele Gelegenheiten mit den Deutschen zu sprechen. In Tokio, wohnen auch viele Deutsche. Sie haben niemals meine Ansichten ueber europaeische schiefe Urteile ueber Japan verneit.

Ihr Aussenminister Herr Willy Brandt besuchte neulich Japan, und er hob die gegenseitige Hochachtung und Mitwirkung hervor. Die Japaner sind immer prodeutsch gewesen und die Deutschen sind auch projapanisch. Ich werde noch heute von meinen Freunden und Bekannten, die nach Europa gehen werden, gefragt : "Welche Stadt ist am besten fuer uns zu wohnen?" Ich antworte immer : "Hamburg!" Ich bin immer stolz darauf, ich einmal ein Hamburger gewesen bin, und ich liebte und achtete meine Nachbarn in Hamburg sehr hoch, ihre Missverstaendnisse ueber Japan ausgenommen.

Aber wie ich in meinem Manuskript geschrieben habe, kann keine wirkliche Freundschaft auf Missverstaendnissen bestehen. Jetzt, glaube ich, kommt die Zeit die Wahrheit zu sprechen. Die unangenehme Gespraechе ueber die Missverstaendnisse will niemals die japanisch-deutsche Freundschaft zerstoeren.

Auch wenn Sie sehr passiv sind in bezug auf dieses Thema, wuerden die Missverstaendnisse langsam beseitigen. Aber ich wollte, dass Sie das Pferd, das sich eine bessere Verstaendigung nennt, anspornen wollten.

Vielleicht habe ich noch eine Gelegenheit in meinem Leben Deutschland zu besuchen, und wird ich dann finden, ob die Kenntnis der Leute sich in bezug auf Japan viel gebessert haben wird.

Erst nach sechs Monaten kommt mein Manuskript endlich zurueck, dank der Muehe von Dr. Hans Schwalbe, der Deutschen Botschaft in Tokio und Ihrer Freundlichkeit.

Ich moechte Ihnen nochmal danken.

Mit freundlichen Gruessen

cc: Herrn Dr. Hans Schwalbe

Pressereferent, deutsche Botschaft, Tokio

(Shinichiro Ohashi)

＜注＞

- (24) 1965年、起稿後間もない頃、冒頭の前稿数枚を読んだフォン・グラゼナップ先生は、その内容に疑問を持ち、友人や知人に確かめてみたところ「殆どすべての人がそのような対日観を持っていることが分かり、驚いた」と述べておられる。また、日本に長く滞在するあるドイツ人学者が第1回発表分（紀要第5巻、1988）を読み、事実到大分誇張があるのではないかと思ひ、その後一時帰国の際に自分で取材してみると、ドイツ人の抱く日本に関する一般通念は、「何と20数年前に書かれた本報告書の内容と一致していた」と語った。
- (25) 日独比較文化論Ⅴ、第9章第10節72頁参照。
- (26) 本文の記述にあたり日本史の参考文献として使用したテキストの一冊はイギリス人によりロンドンで発行されたものであり、注(5)ではサイディンスティッカー教授のエッセイから引用させて頂いている。他にも教科書を通じ、ライシャワー、キーン、マクリーン、レゲット、ミルワードその他大勢の学識経験者が、日本における大学の語学教育に貢献しておられる。
- (27) 書簡にはこの日付、つまり1967年3月23日(木)に原稿を送り返したとあるが、その封筒の消印は3月24日(金)、また原稿を入れた封筒の消印は3月27日(月)付であったと記憶する。したがって、大使館がおそらくテレックスか電話で新聞社に連絡を取り、新聞社側も迅速に処理して、23日付筆者宛返書を認めたが、原稿は何等かの理由で週明けまで発送できなかったのであろう。大使館からの返書は、新聞社の体面を配慮したものと思われる。いずれにせよ、誠意を以って処理して頂き、原稿が無事手元に戻ったことに感謝している。
- 因みに、その頃から日本に関するマスコミ報道の質がよくなったと聞いている。(注(2)参照) 最近でも、一昨日見たNHK教育テレビ海外ドキュメンタリー「映像記録・現代史1939～1959 ④植民地時代の終えん」(ドイツZDF, 1991)はすぐれた作品で、東南アジアを占領した日本軍に関する論評にも何等異存はなかった。
- (28) これは原稿の頁。

The Valley which Falls between Two Hills
 — Real Comprehension and Misunderstanding VI
 — Japan, known by too few —
 Shinichiro Ohashi